

コカブ (露地) (黒ボク土)

〔土壤肥料〕

本作目は、栄養生長から生殖生長に不完全ではあるが転換する型である。窒素の吸収パターンは山型を示し、収穫後の土壤中残存養分は比較的強く制御できる。リン酸に対しては低～中領域に適應できる。ただし、生育前期は窒素、カリに対する反応は敏感であり、加えて一般に生育期間が短いため、速効性の肥料を用いる。

〔病害虫・雑草防除〕

密植、過湿を避け、べと病等の発生を抑える。萎黄病等の発生圃場では耐病性品種を利用する。光反射マルチの利用、被覆資材によるべたがけやトンネルを行い、病害虫の被害を回避する。根こぶ病を対象とした土壤施用剤は作条土壤混和を行い、圃場への農薬投下量を削減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	土壤診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点にたった投入量管理を行う。 緑肥作物を利用する。	堆肥は前作施用 2～3t/10a
化学肥料 低減技術	基肥は、畝内のみでの局所施肥とする。 肥効調節型肥料を利用する。 有機質肥料による施肥を行う。	分量で施肥基準 以下 有機質肥料併用の 場合には化学肥料 低減率20～50%
化学農薬 低減技術	BT剤をローテーション散布に位置づける。 (対象：コナガ、アオムシ、ヨトウムシ類など) 抵抗性品種を利用する。 (対象：根こぶ病) 光反射マルチを利用する。 (対象：アブラムシ類、ウイルス病、雑草など) 被覆資材によるべたがけ、トンネルを行う。 (対象：コナガ、ヨトウムシ類など) 性フェロモン剤による発生予察、誘殺を行う。 (対象：コナガ、ハスモンヨトウなど) 性フェロモン剤により交尾阻害を図る。 (対象：コナガ、ハスモンヨトウ) マルチ栽培を行う。 (対象：雑草)	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	未熟な有機物の施用は、変形根発生の原因となるので、前作に有機物資材を十分施用しておく。なお、地力保全のため当季に施用する場合には播種位置から離して溝施用する。 有機質肥料は、播種の遅くとも20～30日前までに施肥し、分解を促進させておく。 水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保などを図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。	

コカブ (施設) (黒ボク土)

〔土壤肥料〕

本作目は、栄養生長から生殖生長に不完全であるが転換する型である。窒素の養分吸収パターンは山型を示し、収穫後の土壌の残存養分は比較的強く制御できる。しかし施設では、残存養分の過剰な蓄積を回避に注意する必要がある。リン酸は、低～中領域に適用できる。ただし、生育前期は窒素、カリに対する反応は敏感であり、加えて生育期間が短いため、速効性の肥料を用いる。

〔病害虫・雑草防除〕

密植、過湿をさげ、べと病などの発生を抑える。萎黄病等の発生圃場では耐病性品種を利用する。根こぶ病を対象とした土壌施用剤は作条土壌混和を行い、圃場への農薬投下量を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点にたった投入量管理を行う。 緑肥作物を利用する。	堆肥は前作施用 2～3t/10a
化学肥料低減技術	基肥は、畝内のみでの局所施肥とする。 有機質肥料による施肥を行う。 肥効調節型肥料を利用する。	成分量で慣行施肥量の20%減 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20～50%
化学農薬低減技術	BT剤をローテーション散布に位置づける。 (対象：コナガ、ヨトウムシ類など) 抵抗性品種を利用する。 (対象：根こぶ病) 夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 (対象：土壌病害虫、雑草など) 光反射マルチを利用する。 (対象：アブラムシ類、ウイルス病、雑草など) 流動性被覆資材を利用する。 (対象：べと病など) 近紫外線除去フィルムを利用する。 (対象：ハモグリバエ類など) 開口部やサイドを防虫ネットで被覆する。 (対象：アブラムシ類など) 性フェロモン剤による発生予察、誘殺を行う。 (対象：コナガ、ハスモンヨトウなど) 性フェロモン剤により交尾阻害を図る。 (対象：コナガ、ハスモンヨトウ) マルチ栽培を行う。 (対象：雑草など)	慣行使用回数の20%減
その他の留意事項	未熟な有機物の施用は、変形根発生の原因となるので、前作に有機物資材を十分施用しておく。なお、地力保全のため当季に施用する場合には播種位置から離して溝施用する。 有機質肥料は、播種の遅くとも20～30日前までに施肥し、分解を促進させておく。 水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保などを図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。	